

二〇二〇年度

適性検査型入学試験Ⅰ両国型

注意

- 1 問題は **1** のみで、**5ページ**にわたって印刷してあります。
- 2 試験時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけ**を提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受験番号と氏名**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

受験 番号	
氏名	

中村中学校

問題は次のページからです。

1 次の文章1、文章2 を読んで、あとの問題に答え

なさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。

文章1

小学校に上がるころ、ほとんどの人が聞いたたり歌ったりした記憶きおくがあると思いますが、「一年生になったら」という歌があります。「一年生になったら、友だち百人できるかな」という歌詞なのですが、あれっけてっこう強烈きょうれつなメッセージですよ。小学校の一年生になったら、友だちを百人作りたい、あるいは百人友だちを作ることが望ましいのだという、暗にプレッシャーを感じた人も多いのではないでしようか。

学校というのは、とにかく「みんな仲良く」で、「いつも心が触れ合ふって、みんなで一つだ」という、まさにここで私は「幻想*げんそう」という言葉を使ってみたいのですが、「一年生になったら」という歌に象徴しやうちやうされるような「友だち幻想」というものが強調される場所のような気がします。けれど私たちはそろそろ、そうした発想から解放されなければならぬと思っっているのです。

15

《中略》

「○○ちゃん、そんな一人でいないで、みんなの輪に入りなさい」という言葉にかえって圧力のようなものを感じる子供や、みんなと一緒いっしょになれないということに気を配るあまり「僕はダメなんじゃないか」と思う子どもも少なくありません。また理屈りくつを超えて「こいつとはどうしても合わない」というクラスメートだっているはず。大人になつてからは、みんな誰もだれがそういう体験たいけんをしているはずなのに、「子どもの世界はおとなの世界とは違ちがう。子ども

25

というのは、子どもの世界にあまりにも透明とうめいで無垢*むくなイメージを持ちすぎなのではないでしようか。

学校文化を振り返ふって考えると、これまではやはり「同質的共同性」という側面にしか目が向けられてこなすぎたのではないかと思ひます。

30

「クラスはみんな仲良く」という考え方には、昔はたしかに現実いんざい的な根拠こんきよがあつたのです。

なぜなら、小学校はだいたいムラに一つひとつだったからです。

「自然村」といわれる農村社会学の概念*がいねんがあります。行

35

政村と対比される概念で、だいたい室町時代むろまちから江戸時

代までの間に人びとが自然に集まってできた集落のことで、明治時代になってこの自然村を基盤きばんに小学校が建つてくるわけです。そうすると、そこは代々家族ぐるみで顔見知りの子供たちが集まることになります。お互い親同士たがも顔見知りで、場合によっては何代も前から、「あの家はこうで、こつちの家はああで」と知っていて、「あの家から今度は次男坊じなんぼうが入ってきた」というような、学校を支える地域ぐるみでの濃密のうみつな関係がはじめからできていたのです。

45

そういう中で学校やクラスの運営がされていたわけで、近隣きんりんネットワークのあり方が今とは全然違うわけです。昔の濃密な近隣の支えがあつてはじめて、「クラスみんなが仲良くなれるかな」という状態だったので。

むろん、昔のそういう時代だつて、じつさいはクラス全

50

員が仲良くなるというのは難しかったとは思いますが、でも、今に比べれば、ムラの共同的生活を核かくにした地域の支えがとて強かった。村中が総出で田植えや稲刈りいねかを共同で行つたり、道路が傷めば道普請みちづしんをし、共有林の下刈りなどの共同作業もありました。そうした地域の支えという現実55的根拠があるからこそ、学校における共同性は実現していたわけです。

しかしとりわけ一九八〇年代以降は、都市部ばかりではなく地方においてもそういう支えがほとんどなくなつてきていて、地域自体が単なる偶然ぐうぜんにその場に住んでいる人たちの集合体になっていきます。同じ地域から学校に通つて来ていると言っても、先生方は今でもついつい「クラスは運命共同体だ」というような発想になりがちなのだけれども、子どもたちは単なる偶然的な関係の集まりだとしか感じていない場合が多いのです。

65

こうした状況じょうきょうの中で、クラスで本当に「こいつは信頼しんらいできるな」とか、「この子」といってと楽しいな」という、気の合う仲間とか親友というものと出会えるということがあれば、それはじつは、すごくラッキーなことなのです。そういう友だちを作つたり出会えたりすることは当然なので、はなくて、「とてもラッキーなこと」だと思つていたほうが良いことは多いような気がします。

70

そういう偶然の関係の集合体の中では、当然のことですが、気の合わない人間、あまり自分が好ましいと思わない人間とも出会います。そんな時に、そういう人たちとも「並存」「共在」できることが大切なのです。

75

そのためには、「気に入らない相手とも、お互い傷つけない形で、ともに時間と空間をとりあえず共有できる

作法」を身につける以外にないのです。大人は意識的に「傷つけあわず共在することがまず大事なんだよ」と子どもたちにも教えるべきです。そこを子どもたちに教育していかないと、先生方のこれからのクラス運営はますます難しくなると思います。「みんな仲良く」という理念も確かに必要かもしれませんが、「^⑦気の合わない人と並存する」作法を教えることこそ、今の現実*そくに即して新たに求められている教育だということです。 85

（菅野 仁『友だち幻想 人と人の

へつながり』を考える』筑摩書房）

〔注〕

- * 幻想……現実にはないことをあるかのように心に思いうかべること。また、その思ったこと。
- * 無垢……けがれがなく清らかなこと。
- * 概念……ある事物のおおよその意味内容。
- * 道普請……道路を直したり作ったりすること。
- * 即して……その時どきで変わる事態に合わせて。

文章2

いままでは、少なくとも一九八〇年代までは、遠くで*かすみ（霞が関で）、誰かが（かんりよう官僚が）決めてくれていたことに、何となく従っていけば、いろいろ小さな不都合はあったとしても、だいたい、みんなが幸せになれる社会だった。しかし、いまは、自分たちで自分たちの地域のことに5ついて判断をし、責任を持たなければならぬ。その判断を誤ると、夕張市のように自治体でさえも潰れる時代が来てしまったのだ。

ただ、この一点が変わったために、日本人に要求されているコミュニケーション能力の質が、いま、大きく変わっているのだと思う。いままでは、遠くで誰かが決めてい10ることを何となく理解する能力、空気を読むといった能力、あるいは集団論でいえば「心を一つに」「一致団結」といった「価値観を一つにする方向のコミュニケーション能力」が求められてきた。

しかし、もう日本人はバラバラなのだ。
さらに、日本のこの狭い国土せまに住むのは、決して日本文化を前提とした人びとだけではない。

だから、この新しい時代には、「バラバラな人間が、価値観はバラバラなままで、どうにかしてうまくやっていく20

能力」が求められている。

私はこれを、「協調性から社交性へ」と呼んできた。

「平田君は、自分の好きなことは一生懸命、集中して頑張るけれども、どうも協調性に欠けるようです」と小学校一年生から通信簿に書かれてきたような人間が、作家や芸術家になる。私自身、自分の好きなことしかやってこなかったし、協調性はないものと自覚している。

しかし、演劇は集団で行う芸術なので、演劇人には「社交性」はあるのだ。私たちは、幕が下りるまではどんな嫌な奴とでも、どうにかして仲良くする。プロの世界などはひどいもので、舞台上では、「あなたがいなければ死んでしまうわ」と言っている。楽屋に帰ればそっぽを向いている連中もたくさんいる。それでいい舞台ができるのなら、私としてはまったくかまわない。これもまた「社交性」だ。

しかしこの社交性という概念は、これまでの日本社会では「上辺だけのつきあい」「表面上の交際」といったマイナスのイメージがつきまとった。私たちは、「心からわかりあう関係を作りなさい」「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」と教え育てられてきた。

しかしもう日本人は心からわかりあえないのだ……と言ってしまうと身もふたもないので、たとえば高校生たち

は、私は次のように伝えることにしている。

「心からわかりあえないんだよ、すぐには」

「心からわかりあえないんだよ、初めからは」

この点が、いま日本人が直面しているコミュニケーション観の大きな転換の本質だろうと私は考えている。

心からわかりあえることを前提とし、最終目標としてコミュニケーションというものを考えるのか、「いやいや人間はわかりあえない。でもわかりあえない人間同士が、どうにかして共有できる部分を見つけて、それを広げていくことならできるかもしれない」と考えるのか。

「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」という言葉は、耳に心地よいけれど、そこには、心からわかりあう可能性のない人びとをあらかじめ排除するシマ国・ムラ社会の論理が働いてはいないだろうか。

実際に、私たちは、パレスチナの子どもたちの気持ちはわからない。アフガニスタンの人びとの気持ちもわからない。

しかし、わからないから放っておいていいというわけではないだろう。価値観や文化的な背景の違う人びとも、どのようにして共有できる部分を見つけて、最悪の事態である戦争やテロを回避するのが外交であり国際関係だ。

好むと好まざるとにかかわらず、国際化する社会を生き
ていかなければならない日本の子どもたちに、より必要な
能力はどちらだろう。もちろん協調性がなくていいとは言
わないが、日本の子どもたちは世界標準から見れば、まだ
まだ集団性は強い方だ。ならばプラスαの能力として、こ
れからの教育が子どもたちに授けていかなければならない
のは、この「社交性」の方なのではないか。

（平田オリザ『わかりあえないことから

——コミュニケーション能力とは何か』講談社）

〔注〕

*霞が関……国の中央省庁が集中している東京都千代

田区内の地名。ここでは「役人や官僚の

世界」という意味で使われている。

〔問題1〕

⑦ 「気の合わない人と並存する」作法とありま
すが、社会全体がこの作法を身につけることで、
これからの社会においてどのような具体的な利
点がありますか。文章2の中から探し、解答ら
んに合うように三十五字以上四十五字以内で答
えなさい。（、や。も字数に数えます。）

〔問題2〕

① 協調性とありますが、これは文章1に書かれ
ている「学校文化」の中では、どのようなこと
を表していると考えられますか。文章1の中の
言葉を使って、二十字以上三十字以内で書きな
さい。（、や。も字数に数えます。）

〔問題3〕

あなたがもしクラスの学級委員に任命された場合、クラスをまとめる立場としてクラスの人たちと関わっていく中で、何を意識し、どのように行動していこうと思いますか。 **文章1**と **文章2**、それぞれの内容をふまえて、四百字以上四百四十文字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の〔きまり〕にしたがうこと。

条件 次の三段落構成にすること。

- ① 第一段落で、 **文章1** と **文章2**、それぞれの内容にふれること。
- ② 第二段落には、〔①〕をふまえ、意識したいことを書くこと。
- ③ 第三段落には、〔②〕をふまえ、行動を具体的に書くこと。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけです。
- 行をかえる場合は行をかえてはいけません。
- 「や、や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。（ます目の下に書いてもかまいません。）
- 「と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。
- 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのます目は、字数として数えませんが、

以下白紙です。